明治20年9月2日発行の『おうさんだい』（林岡文太郎主幹）第21号に、「

」なる問題の解義が掲載され、その

解答者のひとり「林鶴一」という人がある。

当時若々しい林先生は（数へ年で）十五歳、中学生であった。多分上の「林鶴一」は林先生その人であろう。

昨年の林先生
行きを回想し

林鶴一先生のことども

小倉金之助

今日林先生の一周忌を迎へるに当って、追慕の念の切々として胸に迫るものあるを感ずる。

私は明治39年の秋以来、先生に師事し、満三十年に亘って、先生の並々ならざる知遇を受けたものであるが、特に東北大学の初期満六年間（明治44年—大正6年）は、数学教室の助手として、親しく先生の指導の下に働いたのである。

二三

今懐かしく出るまゝに、この感想を述べて、追慕の情を表したい。

しかし、大体、評がましい言葉は出るかも知れないが、先生は多分例の調子で、「小倉また何か書いてゐるな」位のところで、お許し下さるだらうと思ふ。

先生の仕事は、およそ数学と名のつく限り、深さと一切の範囲に亘ってゐる。それは獨り純粋数学の研究家・教授者・大なる著述家たるのみに止まらなかった。先生は現代的なる数学教育の最大なる指導者であるとはいへ、古い和算から至和算史の最大なる研究者の一人であった。実用数学の先駆者である方面に於ては、数学の基礎強化の興味を持ち、

日本 令和 原稿用紙

『哲学概論』の寄稿の階段や、ポアンカレの『科学と臆説』の翻訳などを回想した。仙台時代の田辺元博士に寄せられた先生の厚意も、また忘れられてはならないと思っている。

先生は何処からあれだけの教養を得られたのであろうか。私の仙台時代に、私は数学に無関係と思はれるやうな読書については、ついに一言も先生から聞いたことがなかった様に覚えている。どうも先生の教養は、主として数学その他の研究――数学に関係あることならば、何でも調べて見たいと、いや知りたい、一切のことを知りたいという熱意から、結果し得たものではないかと、私には思はれる。大正晩年には、私の学生時代をすぎて、随分広範の範囲を拡大されたし、また横結合をもいよいよ新しまれたやうであるが……。

先生は表面的には豪放磊落に見えたが、内面的には綿密な人であった。すべては計画的に、漸進的に、そしてそれにあれだけの精力を熱意をもって当られたのである。

かやうな先生が晩年に心境はどんなものであったろうか。「専門の論文を書いているものが、必ずしも数学を理解しているのではないよ」と、語られたことがあった。

あの驚異すべき努力を通じて

先生の残された最も価値ある仕事の一つは「東北数学雑誌」の発刊であった。しかし専門的数学雑誌発行の企を、私は昭和42年頃、先生から度々聞かされていた。その当時は先生の「数学叢書」(大倉書店)がよく売れた時であり、先生は雑誌の経済的独立を、(美当)この方面に求める積りであったらしい。併しこの計画が、(未だ)最後の断案に達しない中に、東北大学に赴任されることになり、それは昭和44年「東北数学雑誌」として出版したのである。先生はこの雑誌を、どんなに愛されたことか。また数学教室の諸先生方が如何に(よく)協力一致して、この雑誌のために働かれたことか。(それは誠に微笑ましき思出の種である。)雑誌の基礎も漸く確立した頃になり、それは会計上の或る理由によって、先生の独立経営から大学の手に移されることになった。その時に、先生はどんなに、この移管を惜まれたことであったろう。……

この雑誌こそ、一般数学者に開放された国際的発表機関であり、(わが)数学の発達に(重)大なる影響を与えたものであったが、しかし

創刊時代の私は、そんなことを意識するよりも、寧ろ雑誌の仕事が面白かった。毎号印刷の日が待たれ、発送の手数さへも楽みだった。

それは誠に微笑ましき思出の種である。

昭和44年4月15日の通牒の中に、奥様からお話があったのだった。

先生は青年時代に、勢々として多数の問題を解いて勉強された。「高等学校時代にクリスタルの太代表の問題を五人で解いた」と、聴いたこともあるし、また岡部勇性の先生から

その時代に就いて氏は次の興味あるエピソードを語っている*

「河合(十太郎)氏は(先生)学校の課題に大いに勉強を試みられ、主として三角法に力を入れ一日百題宛解く様命ぜられた。容易な部分では一日百題も努力次第で何とか片付けられようが、これが何時までも続く筈はない。難解な所では一題解くにも数々の時間を要する。さしもの勉強家の先生も遂に匙を投げて百題の不可能を愬へられると、河合氏は諦められず、今後は出来るだけやれもそはれた。これに力を得て、また続行する

4

*『養正会報』、昭和10年12月
岡部勇氏「六十餘年の御生涯」、

*藤澤拓三郎氏「林從一男を懐ふ」、『月刊学』、昭和11年2月号

ロックの ~~大三角~~ 大三角法

と云ふ有様であった。

或時 ~~Rock~~ ロック, Higher Trigonometry の 或る問題に関する問題を解いて居られた時のことである。或る問題を解くのに三日三晩考へてられたが解らないので、博士から ヒントを得ると、氏の前にもられると、「これはすぐ出来るから、もう一度考へよ」と。師の云はれる儘に再び机に向って三日間、遂に力書き、この問題の前には已むなく降参の態で再び師に教を乞はれると、「もう一日考へよ、すぐ出来る」とのことであった。が、これを始め考へると一週間、遂に大判用紙三枚を費して解を得られるに至った。少くとも「すぐ出来る」筈はないと、所謂「すぐ出来る位」の教示を乞はれたが、博士自身悩みられて、すぐには出来ない。「てゝに紙三枚を費して解が出て居る」と指摘されると、氏は先生の慈心に打たれ、益々研鑽を積ませられたものとである。…」

むつ

事実、私達から見ては中々難しさうに見える問題が、先生の手にかゝると、難なく平易な方法で解かれることは、甚だ屢々見られたところであった。――これに数学研究に対する先生の特徴があった。

理論物理学専攻の志から、故あって数学の研究に転換した私は、問題を解くことも下手であったし、問題に解り甲斐も持たなかった。先生から見たならば、手のつけやうもない、~~[illegible]~~ 厄介の~~[illegible]~~、偏頗的な存在であったらうと思ふ。

そのためであったらう、確かに明治44年頃に、私はクラインの名著『高等幾何学講義』――この本には詳しい証明などを省いた個所が多いのである――を読んで、これを熟覧したところ、先生から「クラインを読むと愚鈍になるよ」と、冷かされたことがあった。その後にも、たびたび

「基本的概念の確立に十分の力を入れずに、自分にも よく解らない様な、高尚らしい新しがりの講義をするな」

3|3 令和 証券用紙

もか、

「自分の力倆のみいやしないやうな論文を、よくも書化させずに紹介好な」

と云ふやうな教訓を受けたのである。

何の藤村先生らしいところがあった。

先生は良き常識と良き識見の持主ではあったが、~~しかし或る特定の理論を以て武装したり、確乎たる社会観の上に立つ人ではなかったように思はれる。そして~~

それにしても、史料批判を長所とする三上兄との、和算史に関する論争~~までも造~~

~~憾であったと思はれる。~~ 直ちに~~ならざら~~

この論争には、先生も随分神経を痛められたらしい。

この点がヒューマニストたる三上兄が許すべきならなかったのであらう。

三十年の間、私が本当に先生から叱られたと思ふ記憶は、たゞ一つだけである。それは大正13年に私が「岩波教育の私本問題」を公にした後、先生にお目にかかった時、面のあたり、「何のために あの本を出したの」と詰問された。私は驚いて、「なぜ悪いのですか」と反問したところ、先生は激しく黙されたのみで、それ切り黙された。…

私は切に先生の陰性さを信ない。

「岩波教育史」を出したときには、大に私を褒かして下されたが、それでは近い将来に於て駄目な筆の、その点は特に気を回して厚ほどられた様であった。

私はあれだけの先生でさへ、和算批判の意味を虚心に受入れられないやうな、日本和算界の不幸を思ふ。

先生は時には獨裁的であり、また妙に官僚的でもあった。しかし客觀的に考へて見れば、先生の進歩的側面は、何よりも先づ、先生の民主主義的感覚、自由主義的傾向に基づいたと思はれる。——先生自身は「主義」といふ言葉を、あんなにも嫌はれたに拘はらず——。

日清戦争の直後に学窓を出られた先生は、急激に発達した日本資本主義社会と共に展開されたのである。

日露戦争後に起つた政治的・思想的解放運動は、故あって京大を去った後、田舎の中学教師を経て、高等師範学校の書記となった当時の先生の上にも、何等かの形で反映したに相違ない。私が初めてお目にかかった思想的青年時代の先生は、私の眼には正に「青年の友」として映じたのであった。先生の政治的意見を伺ったことは少なかったが、それでも大正末年には、憲政擁護運動に左袒されてゐたのである。「教育叢書」の編纂も、「東洋教育新説」の創刊も、また「日本中等教育会」の建設も、当時の教育界に於ける半封建的官僚的傾向に対する一種の解放運動であり、革新的意味を含んでゐたのである。

それは学問上に於ける

もし断然たる角度から見るならば、先生があれだけの努力を傾注されたことは、忘れる能はざるものである。

私は断然たる時代に於て、先生の偉業を、偉大なる信念に基づいたことの幸福を、忘れる能はざるものである。

先生の壮年時代

昭和十一年十月四日
林先生一周忌の日